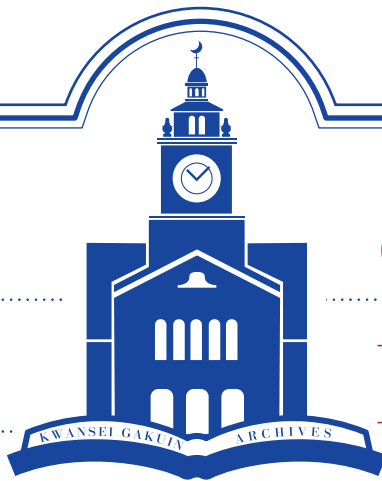


Kwansei Archives



Gakuin Newsletter

学 院 史 編 纂 室 便 り

No.

59

特集：総合学園

2025・春学期

- | | | |
|---|------------------------|--------------------------|
| 1 | 村瀬 義史
関西学院院長補佐 | 神戸三田キャンパスからみる関西学院史 |
| 2 | 山本 伸也
元関西学院大学教育学部教授 | 聖和キャンパスからみる関西学院史 |
| 3 | 大橋 毅彦
関西学院大学名誉教授 | 原田の森と古本屋——足立巻一『親友記』の一側面 |
| 4 | 山 泰幸
災害復興制度研究所長 | 阪神・淡路大震災30年と災害復興制度研究所の歩み |
| 5 | 倉田 麻里絵
関西学院大学博物館学芸員 | 「関西学院のヴォーリズ建築」展を振り返って |
| 6 | 学院史編集部 | 活動報告 |

神戸三田キャンパスからみる関西学院史

関西学院院長補佐、総合政策学部准教授・宗教主事 村瀬 義史

神戸三田キャンパス（KSC）設置から30周年の今年4月、関西学院大学は、KSC近接地にインキュベーション施設「Spark Base」と学生寮「創新寮」、そして市民の方々も利用できる商業施設によって構成されるCo-Creation Village（C-ビレッジ）を開設しました。本学の教育・研究を核としつつ、自治体・企業・学校・地域住民などの多様なアクターが交流・協働し、起業家の育成と研究成果の社会実装、そして地域課題の解決に向けた取り組みを進める実践拠点になることが期待されます。

協働によって従来にはない新しいものを生み出す姿勢は、KSCにおいて大切に伝承されてきました。原田の森～上ヶ原という一つの拠点で百年以上を歩んできた関西学院が、21世紀の新たな学院の発展を期して初の第二キャンパス、KSCを設置し、学際的研究により地球規模の問題解決のための政策立案をめざす総合政策学部を開学したのは1995年4月のことです。

同年1月17日に発生した阪神・淡路大震災による悲しみと混乱が広がる中、「自然と人間の共生、人間と人間の共生」を学部理念に掲げる総合政策学部が一期生396人を迎えて始動しました。国際的な人脈も駆使して集められた多様な分野の教員陣が協働し、とりわけ草創期において、従来にはない新しい教育・研究を意識的に開拓したこと、学生たちも学びを生かし行動を起こす意欲にみなぎっていたことが様々な形で語り継がれています。



神戸三田キャンパス全景（2025年5月、撮影：藪口雄也）

その後、2001年に理学部が西宮上ヶ原キャンパスから移転して02年度から理工学部へと改組され、KSCは二学部体制となります。それぞれの学部の改編・発展と共に、講義・研究棟が増築されていきました。13年には関西学院

院初のアカデミック・コモンズが建設されました。ここは学部の垣根を超えた学生・教員による新たなつながりとアイデアの創出を促すとともに、学生主体の独創的なプロジェクトを支援するアクティブラーニングの場です。そして21年、長く二学部体制であったKSCは、四つの理系学部（理・工・生命環境・建築）に総合政策学部を合わせた五学部体制へと生まれ変わりました。KSCの学生総数は学部生5,646人、大学院生574人にのぼります（2024年度）。

以上に素描したKSCの発展は、時代の要請に応えるべく改革と挑戦を続けてきた関西学院の姿勢をよく表すものであり、多くの方々の祈りと努力の賜物であることは言うまでもありません。しかしこのような研究教育の枠組みの変化と拡張の背後で、キリスト教主義に立脚する関西学院としてのアイデンティティが不断に追求されてきたこと、また、「上ヶ原ではないほうのキャンパス」であるゆえの、そして郊外のキャンパスならではの苦勞を乗り越える学生・教職員の様々な工夫がなされてきたことも、KSCの歴史と気風の形成に不可欠の要素であると言えます。

KSC史は136年の学院史における最近の30年間ですが、この期間は、KSCに続いて六つのキャンパスが開設され、学部・研究科が増え、幼稚園、短期大学、初等部、千里国際学園の諸学校が加わり、構成員の「関学ライフ」が急速に多中心的になり、学院史を構成する潮流がより多元化した時代でもあります。奇しくも同時期に進行したICTの発達とコロナ禍が生み出した「ニューノーマル」は、地理的には離れている各キャンパスをより近づけ、互いに関心を持ち、関西学院が一体感を保って活動を進める上で大きな助けになってきました。

約3万人が学び働く関西学院の各パートの活動は多忙を極めており、学院全体のミッションや建学の精神は忘れられがちになります。それは一部の人だけが意識していればよいものではないはずです。よりよく使命を果たすために大小さまざまな改革を今後も続けていかねばなりません。が、時流と変化の中で関西学院としての命を失ってしまわぬよう繰り返し原点に立ち戻ることが、関西学院の現在を担う私たちにとって大切ではないでしょうか。

（むらせ よしふみ）

聖和キャンパスからみる関西学院史

元教育学部教授・関西学院短期大学非常勤講師

山本 伸也

聖和の沿革

2009年4月、学校法人関西学院と学校法人聖和大学の法人合併により学校法人聖和大学は廃止され、現在の聖和キャンパスには教育学部、大学院教育学研究科、関西学院短期大学、関西学院幼稚園がある。本稿では短期大学及び幼稚園に焦点を当て、聖和の歴史を説明したい。

関西学院短期大学は3つのルーツを持っている。1つ目は1880年に宣教師J. E. ダッドレーとM. J. バローズが神戸の花隈に開設した女子伝道学校であり、1908年に神戸女子神学校となった。2つ目は1888年にW. R. ランバスの母であるM. I. ランバスが神戸山2番の自宅で開設した神戸婦人伝道学校であり、この学校は1913年にランバス記念伝道女学校となった。最後は英和女学校保姆養成科（1908年、保姆師範科に名称を変更）であり、聖和の幼児教育・保育の源流となる。関西学院幼稚園は英和女学校附属幼稚園（1891年）を起源としている。

広島女学校（現 広島女学院）の創設期

米国から広島に帰郷した砂本貞吉はJ. W. ランバスとともに1886年10月に私塾広島女学会を開き、この私塾は1887年2月に英和女学校となった（『広島女学院百年史』、1991、pp. 3-7）。1887年10月、W. R. ランバスの要請に応じてN. B. ゲーンズが来日し、1889年9月に英和女学校の校長に就任した。



上流川校地の校舎（1890年）

ゲーンズは1891年9月に保育を始め、1892年2月に正式な認可を得て9月に英和女学校附属幼稚園を開園した。1895年には保姆養成科が設立され、1896年に英和女学校は広島女学校となり、1908年に保姆養成科を名称変更して保姆師範科とした。

ランバス女学院

1919年、ランバス記念伝道女学校と広島女学校保姆師範科を合併し、新たな学校を大阪に建設することが決議された。学校名は2つの学校の設立に関わったランバスファミリーの人々を記念してランバス女学院とされた。

1921年4月、ランバス女学院保育専修部が開設され、翌年2月に保育専修部の実習園としてのランバス女学院附属幼稚園が正式に開園した。さらに翌年5月には学院の新校舎が竣工し、保育専修部と神戸にあった神学部が併置された。



ランバス女学院新校舎（1923年）

ランバス女学院に関して特筆すべきことの一つは、関西学院の教師陣が授業を担当しただけでなく講習会等の教育活動にも関わったことである。開学初期から関西学院の松下績雄、堀峯橘、亀徳一男、曾木銀次郎、今田恵らが保育専修部あるいは神学部で授業を担当した。例えば、今田恵は授業を担当するだけでなく母親学校や講習会の講師及び児童相談所の所員も務めた（『聖和保育史』、1985、pp. 107-120）。聖和が関西学院と最も密接な関係があった期間であったと思われる。

聖和女子学院から現在まで

1941年4月、ランバス女学院と神戸女子神学校の合同により、西宮市岡田山で聖和女子学院が開校した。関西学院が上ヶ原に移転したのは1929年であり、神戸女学院が岡田山に移転したのは1933年であった。

聖和女子学院は1950年に聖和女子短期大学に、1981年に聖和短期大学に、1988年に聖和大学短期大学部になり、現在は関西学院短期大学となっている。ランバス女学院附属幼稚園は1942年に聖和女子学院附属幼稚園となった。幼稚園はその後、2箇所に分かれて運営されたが、1987年に聖和大学附属幼稚園となり、現在は関西学院幼稚園となっている。（やまもと しんや）

*写真2点は関西学院短期大学キリスト教教育・保育研究センター所蔵

原田の森と古本屋

—足立巻一『親友記』の一側面—

関西学院大学名誉教授・元文学部教授・学院史編纂室共同研究員

大橋 毅彦

関西学院が神戸の上筒井から阪急沿線の上ヶ原に移転する昭和の初めの頃おい、彼自身は中学部の生徒だったが、学校からの帰りに立ち寄る古本屋をもう一つの〈教場〉として精神的な成長や脱皮を遂げていく一人の少年とその交友圏——足立巻一^{けんいち}（1913-1985）の自伝的小説『親友記』（新潮社、1984・2）の前半には、そのように紹介できそうな場面がいくつか用意されている。

日本のエッチングの開拓者となった神原浩に図画の授業を担当してもらった中学部の二年を終了、校地の上ヶ原への移転とともに三年生に進級した「わたし」は、「中学部の先輩」で「神戸新川の貧民窟」出身の井上増吉の詩集『日輪は再び昇る』を読んで、「世界がこれまでとはまったくちがった色彩で映りはじめてい」く感に打たれるが、そうした自身の覚醒にさらに拍車をかけた級友粕淵につれられて入ったのをきっかけに、「上筒井の電車通の浜側にある大きな古本屋」白雲堂の年少の常連となっていく。

「わたし」の自宅は西灘村の岩屋にあったから、学校の帰りにひとりでのぞいていかれる。粕淵に勧められて読んだ長編小説『海に生くる人々』が、神戸に育った自分には親しかった船の中に「水夫たちのひどい生活」が隠されていることを描き出しているのに接して、その興奮冷めやらぬままに、その作者葉山嘉樹のもう一つの代表作「淫売婦」が収録された小説集を買ったのを手始めに、平林初之輔の『日本自由主義発達史』や、葉山や岩藤雪夫ら、いわゆる〈文戦派〉と呼ばれるプロレタリア作家たちの機関誌『文芸戦線』の新刊本も入手する。そして、前者を読んでみると、勤王攘夷派の連中がなぜ開国に一変したかについて、小学校以来の国史教科書だけでは分からなかったその理由がわかりやすく書かれていて、「爽快感」を味わう。

さらに、「わたし」の知的な冒険の場を活気づけるべく登場するユニークな存在が、黒の詰襟、色が白くて丸刈りにした朝鮮人の「ぼんさん」（少年店員）である。店に他の客がいないうち、『文芸戦線』の古雑誌をめくる「わたし」に対して「そんな本は、もうつまらんよ」と言った彼は、その代りに小林多喜二の短編「一九二八年三月十五日」が掲載された『戦旗』を新聞紙にくるんでそっと差し出す。またあるときは低い声で「関中はダメね、県商は三年で党員が出たよ」と挑発する。

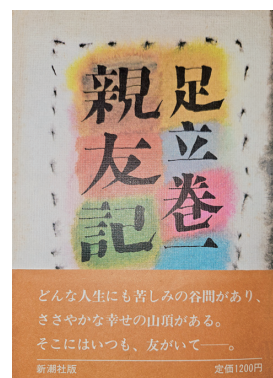
こんな風に中学部の学び舎の一步外に出れば、時代の嵐が吹き付けてくる。事情は原田の森に沿う水道筋にできた

新しい二軒の古本屋の場合でも同じ、すなわちエスペロ書店に通い出した「わたし」は店の主人からエスぺラント語の手ほどきを受けながら、その合間にはザメンホフという名前を聞きかじり、字仁^{うに}菅書店では「学生さん、これ、伏せ字が全部埋めてあります」と言われて、いそいそとレーニンの『何を為すべきか』を手に入れる。

原田の森の古本屋からかけられたこうした深情けは、「わたし」が中学生生活を終え、伊勢の皇学館の入試に落ちた後も途切れない。すでにその頃には新聞に短歌を投稿する味を覚え、学外で知り合った同好の少年たちと同人誌をつくり出していた「わたし」は、その何度目かの試みとして、詩だけの同人雑誌『青騎兵』創刊に情熱を傾けていく。そして、その発行所兼印刷所となったのが、同人の一人がこれまた水道筋に開いた博行堂書店という古本屋であった。

博行堂は間口一間半の狭い店で、その奥はまるで洞窟のよう。しかし、売り台の奥の二畳敷の畳の間に謄写版を置いて『青騎兵・1』という表紙の印刷に「わたし」たちが取り掛かったその日、「原田の森は燃えたつような新緑に輝き、それにめずらしく風があり、木々は青いタテガミの馬のように揺れた」のだった。生後すぐに父とは死別、母は他家に嫁いだため、伯父の家に身を寄せようやく神戸に定住、その後再び母と暮らし始めるようになるという幼少年期を経てきた「わたし」は、「中学の教室にあふれる無邪気さ、明るさ」の中にあっては異質な存在であった。そして、そこから一歩踏み出し短歌や詩の魅力のとりこになっていく途上で出会った少年たちもまた、それぞれの不遇を背負いながらも、自らへの慰めと励ましとをその中に求めようとしている。そんな彼らの情熱に煽られて原田の森が躍動しているのである。

（おおはし たけひこ）



足立巻一著『親友記』（新潮社、1984）

阪神・淡路大震災 30 年と 災害復興制度研究所の歩み

関西学院大学災害復興制度研究所長・人間福祉学部長

山 泰幸



1995 年 1 月 17 日の未明に発生し、6 千人以上の犠牲者を出した阪神・淡路大震災では、関西学院大学でも学生・教職員に犠牲者が出て、大きな被害を受けることになった。震災後の早い時期から、学長主導による震災に関する全学的な共同研究が始まり、これを基盤にして、震災 9 年目の 2004 年 1 月、全国の自治体・大学・NPO などの復興支援関係者を集め「災害復興制度研究プロジェクト」が開始され、10 年目の 2005 年 1 月 17 日に、被災地の大学の社会的責任として、被災者の生活再建を中心的テーマとする「復興」制度に焦点を当てた、当時としては最先端のテーマである「災害復興」を冠した全国初の研究所として災害復興制度研究所が設立された。初代所長に宮原浩二郎社会学部教授（～2007 年度）、主任研究員に山中茂樹教授（～2014 年度）の体制で出発し、2 代所長に室崎益輝総合政策学部教授（2008～2012 年度）、3 代所長に岡田憲夫総合政策学部教授（2013～2015 年度）、4 代所長に長岡徹法学部教授（2016～2020 年度）、5 代所長に宮原教授（2021 年度）が復帰し、現在は研究所の立ち上げ段階から参加している山泰幸人間福祉学部長が所長（2022 年～）、主任研究員に羅貞一准教授（2023 年～）の体制で運営している。特に現在に至る研究所の体制の確立、研究活動の推進には山中教授の貢献が非常に大きく、感謝を込めて記しておく。

自然災害の多い日本では、理学・工学を中心とした自然科学からの防災研究は発達しているが、被災後に被災者が生活をどのように再建していけばよいのか、被災地をどのように再生していけばよいのか、その支援の方法や制度に関する研究は十分ではなかった。関学の強みである人文社会科学を活かし、法制度を中心に研究を開始し、「災害復興基本法案・試案（2010）」や「被災者総合支援法案（2019）」を作成・提言してきた。

関東大震災（1923）では、後藤新平の「帝都復興」の掛け声のもと、都市再開発型の「復興」概念が登場し、トップダウン式の大規模な都市再開発事業が推し進められた。これに対して、研究所では、関東大震災当時、経済学者の福田徳三（1874-1930）が唱えた、被災者の生活再建を中心とする「人間の復興」の理念を継承し、福田徳三の著書『復興経済の原理及若干問題』を井上琢智（元学長）・山中茂樹編として復刻版（2012）を刊行し、また災害復興制度研究所叢書第 1 巻として、山中茂樹著『人間の復興』（2023）を刊行するなど、「人間の復興」の理念の普及と研究を進

めている。また、その体系化、制度化、実践化を目指して、法制度研究会、首都直下地震の復興を考える研究会、南海トラフ巨大地震の事前復興に関する調査、福島原発事故の広域避難者の全国調査、過疎地域の持続的な地域復興の調査をはじめ、能登半島地震などの大規模災害に応じて研究調査を実施してきた。

主要な行事として、阪神・淡路大震災の発生した 1 月に毎年開催している「復興・減災フォーラム」があり、初日には全国の被災地から被災者や支援者を招いて、被災地交流集会「円卓カフェ」を開催し、復興の経験や教訓を共有・継承し、ネットワークを築く機会としている。2 日目は、シンポジウム形式で講演とパネルディスカッションを行っている。2023 年は「関東大震災 100 年 われわれに遺したもの——帝都復興と人間の復興」、2024 年は「故郷喪失と再生——風土と人間の復興に向けて」、2025 年には「阪神・淡路大震災 30 年、問い直そう——私たちの被災者責任・これからの被災地責任」をテーマに開催した。また東日本大震災を契機に、大規模災害に対応するには国際的な協力関係が不可欠との認識から、特に東アジアの近隣諸国との協力関係の構築を目指して、2016 年 1 月から「東アジアの新たな協働を考える」というテーマで、毎年国際シンポジウムを開催している。

紀要『災害復興研究』を年 1 回、ニュースレター『FUKKOU』を年 3 回、災害復興制度研究所叢書をはじめ、災害復興に関わる重要なテーマを取り上げて書籍を刊行してきた。近年では、研究所紹介や所長対談などの動画、震災 30 年企画として震災レジェンドのインタビュー動画を、YouTube を活用して配信している。

また、全国の大学で初の「災害復興学」の授業（全学開講）を創設し、オムニバス形式で災害復興に関わる様々なテーマを取り上げて講義を行っている。また、研究所を事務局として、日本災害復興学会を設立し、災害復興に関わる研究者、実務家、支援者等と幅広いネットワークを築いている。

（やま よしゆき）



YouTube チャンネル『復興のカタチ』
関西学院大学災害復興制度研究所



「関西学院のヴォーリズ建築」展を振り返って

関西学院大学博物館学芸員特別准教授

倉田 麻里絵

大学博物館開館 10 周年記念として関西学院のヴォーリズ建築を総覧する企画展「天を見あげて—関西学院のヴォーリズ建築—」（2024 年 9 月 28 日～12 月 14 日）を開催した。ウィリアム・メレル・ヴォーリズは学院創立の地である原田の森時代から校舎などを手がけ、学院が移転した上ヶ原においてはキャンパス全体の設計を担った。学院の発展とともにあったヴォーリズ建築の詳細を振り返る本展では、原田の森、上ヶ原両キャンパスに建てられたヴォーリズ建築の図面とその外観、内観写真のほか、ドアノブや階段の手すりなど実際に使われた建物の一部も展示し、校舎やヴォーリズにまつわるエピソードを添えた。展覧会の内容を記録した図録は現在博物館内で販売中である。本稿では今回の調査で印象的であったことを 2 つご紹介したい。

関西学院のヴォーリズ建築リストとマップ

学院の創立時から現在に至るまでに建てられた全建築物の情報を網羅した資料は残念ながらない。そのため展覧会の準備は学院のヴォーリズ建築リストを作成することからはじまった。ヴォーリズ建築事務所による図面と竣工した建物写真をもってヴォーリズ建築と断定することを基本としたが、契約についての記録や学報などから判断したものもある。

調査が難航したのは 1950 年代の建物である。学生数の増加に伴い教室棟などを急いで建設していた時期であり、ヴォーリズ建築事務所が監理のみを担う建物（非ヴォーリズ建築）も見られる。今回は実施設計がヴォーリズの事務所という確証が得られずリストから外したものもあったため、今後のさらなる調査研究で新たなヴォーリズ建築が見つかるかもしれない。

このような調査結果に加え、展覧会では建築図面に書かれたサインから所員を特定しご紹介した。その氏名をきっかけに所員のご遺族がご来館くださるという嬉しい出来事もあった。

1929 年 3 月に学院の校地は原田の森から上ヶ原へ移るが、この時点でヴォーリズによる上ヶ原キャンパスの設計がすべて完成していたわけではない。移転後も増築という形で工事が進められた。本展では「上ヶ原キャンパスに現存するヴォーリズ建築マップ」を作成し、1929 年に竣工した部分とヴォーリズ建築事務所による増築部分を色分け

して示した。なかには他社が増築を手がけた建物もあり、それらを明らかにできたことも本展の意義につながったと思う。図録所収のマップを手に建物を巡ると増築箇所がよくわかる。ぜひ移転当初の学院の姿に思いを馳せてみてほしい。

建物に施された美しい装飾

マップ作成と同時に現存する建物から失われた装飾や照明灯具などを特定する作業もおこなった。時代を追うごとに変化した箇所もあるが、1942 年の金属供出によってさまざまな装飾が失われていることを改めて確認した。上ヶ原キャンパスを象徴する建物である時計台（旧図書館）を例にとると、建物正面の外壁にあった飾り手すりや 1 階ロビーの階段手すりに施されたアイアンワーク（金属製の装飾）が取り外されている。本展では、これまでに復元されていない階段手すりの装飾の模型制作を建築学部ヴォーリズ研究センターに依頼し、実際に模型を階段に設置して公開した（本誌第 58 号 p. 3 参照）。模型によって初めて立体的に見る竣工当時の姿は想像以上に美しく、それと同時にまた失われるようなことを繰り返してはいけないという思いが強まった。大学博物館は模型公開とともに寄付金を募り、鑄造での装飾復元を目指している。復元によって来館者と平和への思いを共有したい。

大学博物館は時計台のなかにある。建築についての展覧会を、その対象となる建物内で開催できることのありがたさを噛みしめた調査であった。



時計台の階段に施されたアイアンワーク 1936 年
（学院史編纂室所蔵『高等商業学部第 22 回卒業記念アルバム』より）

寄付金募集の詳細



本展開催にあたり、関係者の皆さまにご協力を賜りました。ここに記して深く感謝いたします。

（くらた まりえ）

活動報告

関西学院史
紀要 第三十一号

刊行物

『関西学院史紀要』第31号（2025.03.15発行）目次

論文

竹友藻風、志賀勝、由木康、曾根保、岩橋武夫、寿岳文章（一）
—関西学院の英語教育が育んだ人びと—／井上琢智

資料

神崎驥一日記 五／井上琢智

記録

関西学院神学部の朝鮮人留学生の実相—「入学関係資料」
を読み直す—／松谷基和
ミッションスクールの建築史／川島智生

学院史編纂室共同研究報告

「宣教師研究」舟木讓
「関西学院の戦前・戦中・戦後」井上琢智
「関学オーラルヒストリー」山泰幸
「関西学院の学問と社会」荻野昌弘

編集後記／赤江達也

関西学院史紀要 総目次 創刊号～第30号
／石野利香・井上琢智

資料紹介 時計台での午餐会

高等商業学部二十周年記念祭（1931年11月3日）

関西学院大学博物館の展覧会「天を見上げて—関西学院のヴォーリズ建築—」（2024）に感化されて学院史編纂室の資料を繰ってみると、1932年の卒業アルバムに、「午餐会」の写真があった（写真1）。1931年に開催された高等商業学部二十周年記念祭の写真の1枚で、その会場が時計台（旧図書館）2階の閲覧室なのである。

『関西学院高等商業学部史二十年史』（1931）には、「○十一月三日 高等商業学部創立二十周年記念式を挙げる。○同日 十年以上勤続九教授を表彰す。○同日 創立二十周年記念論文集を発行す。○同日 高等商業学部二十年史生る」と記されている。

このとき勤続で表彰されたのは、神崎驥一、W. K. マシュー、小澤瀆、菊池七郎、東晋太郎、奥田勲、馬淵得三郎、石井卓爾、小寺敬一の9名である。また、「祝二十周年」の文字を掲げた時計台前での大集合写真には、最前列中央に第4代C. J. L. ベーツ院長や第2代吉岡美国院長の姿がみえる（写真2）。『関西学院新聞』第70号（1931年11月20日）でも翌年の大学昇格を目前に、高等商業学部二十周年記念祭が華々しく挙行される様子が報じられている。

そんな当時の様子を思い浮かべながら午餐会の会場となった時計台の2階、現在の大学博物館展示室を訪れてみてはどうだろうか。



写真1 時計台での午餐会



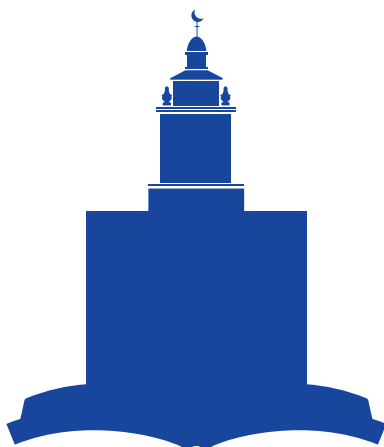
写真2 時計台前での大集合写真

編集後記

21世紀の関西学院は「総合学園」として大きく発展しています（中道基夫『学院史編纂室便り』発行再開によせて）本誌第57号）。そこで本号では、「総合学園」を特集テーマに掲げ、神戸三田、西宮聖和、そして神戸・原田の森（掲載順）の各キャンパスをめぐってご寄稿いただきました。また、災害復興制度研究所の歩み、関西学院大学博物館ヴォーリズ展の回顧をご執筆いただきました。

神戸三田キャンパス開設と阪神・淡路大震災から30年——、第59号をお送りします。

（学院史編纂室長 赤江 達也 あかえ たつや）



『学院史編纂室便り』第 59 号

2025.6.15 (ISSN 2436-1518)

関西学院大学 学院史編纂室
〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL: 0798-54-6022 FAX: 0798-54-6462

<https://ef.kwansei.ac.jp/archives> (日本語)
<https://global.kwansei.ac.jp/archives> (英語)

